

『岷江入楚』と永青文庫蔵『源氏物語』書入

— 花宴巻を中心にして —

小 高 道 子

永青文庫蔵『源氏物語』書入（以下『書入』と略す）については、『斎／幽源氏物語聞書』として、野口元大・徳岡涼両氏により翻刻された^①。同書について徳岡氏は、若菜巻を除くすべての巻が、本文書入ともに幽斎自筆であるとして、幽斎本源氏物語と称することを提唱された^②。しかしながら、この書を細川幽斎が聞書した書とすることは多くの疑問が残る。また、同書の【内容説明】では、本書について『岷江入楚』の礎を築いた、幽斎の源氏物語研究の変遷を今に伝える！^③とするが、本書は『岷江入楚』の礎を築いた^④といえるのであろうか。また本書により「幽斎の源氏物語研究の変遷を」知る事ができるのであろうか。本稿では、花宴巻について『岷江入楚』と『書入』とを比較検討することにより、『書入』について再考したい。

一 『書入』の【内容説明】

『書入』には次の【内容説明】が付されている。「源氏物語誕生1000年！」などとある一部を省略し、私に番号を付す。

① 伝授された源氏物語の奥義と古注釈の享受過程を今に伝える！
【内容説明】

② 幽斎の多数の著作のうち『源氏物語』に書き入れられた注釈部分を翻刻し公刊！

③ 中院通勝が室町末期にまとめた源氏物語最大の注釈書『岷江入楚』の礎を築いた、幽斎の源氏物語研究の変遷を今に伝える！

④ 原本は熊本大学付属図書館寄託永青文庫蔵細川幽斎源氏物語。

⑤ 『紫明抄』『河海抄』『和秘抄』『花鳥余情』『弄花抄』などの古注

積からの引用の他、幽齋独自の注、三条西実隆・宗祇・紹巴・兼載・兼如らの説も見られる。

- ⑥ 幽齋の書き入れには、幽齋が連歌師からの源氏物語講釈によってその解釈を学んだ極めて初期の段階のものと、天正期に九条種通から伝授を受けると同時に、三条西家から借り出してその収集に努め、古注集成の志を抱いた幽齋の源氏学の中核をなすものが反映され、幽齋の生涯を通じて書き入れられていった。
- ⑦ 彼の源氏学は、やがて慶長三年（1598）成立の中院通勝の『岷江入楚』に引き継がれて完成する。

- ⑧ 『岷江入楚』が公のためのものであるならば、本書『幽齋源氏物語聞書』はその礎を築いた幽齋の私的な源氏物語研究の変遷を今に伝える貴重な資料といえよう。

二 『岷江入楚』と『書入』

俊成が六百番歌合の判詞で「花宴の巻はことにえんなる物なり」と記した「ことにより、源氏物語の古注においては、花宴巻のところが「えん」であるのかについて検討した記述がしばしば見られる。中世歌学を継承した三条西家の注釈書を集めた『岷江入楚』においては、俊成判詞を念頭に置いた注釈が見られる。そして、『俊成判詞』を念頭に置いたこれらの注釈は、「箋」「秘」といった公条・実枝の注として継承されることが多い。花宴巻については、「歌よみと源氏物語」において検討を加えた³⁾。

まず『六百番歌合の判詞』（以下、『俊成判詞』と略す）引用は新編国歌大観により、私にA B C Dを付す。

（冬上）十三番 枯野 左勝 女房

五〇五見しあきをなににのこさむくさのはらひとへにかはる野辺の気色に

右 隆信

五〇六しみがれの野べのあはれを見ぬ人や秋の色にはこころとめけむ

右方申云、くさのはらさきよからず、左方申云、右歌ふるめかし判云、左、Aなににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ、右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや、B紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、Cそのうへ花宴の巻はことえんなる物なりD源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり、右、心詞あしくは見えざるにや、但、常の体なるべし、左歌宜し、勝と申すべし

『岷江入楚』（『岷江入楚』の引用は源氏物語古註釈叢刊により、源氏物語古注集成の番号で項目を示す。論述の都合上、引用箇所私に番号を付し、古注集成の番号を○内に記した）は、A「草の原」について(72)「うき身よにやかて消なはたつねても草のはらをとはしとやおもふ」の注で「弄」「秘」「箋曰」「河」、(185)「心いるかたならませは弓はりの月なき空にまよはましやは」の注で「河」「花」「秘」

「聞書」「箋曰」と肩付に記す注を付す。「弄」「河」「花」「秘」「聞書」「箋曰」はそれぞれ『弄花抄』『河海抄』『花鳥余情』三条西公条説、紹巴説、三条西実枝説を示すから、諸注を参照して『俊成判詞』に記された意図を探っていることがわかる。B「紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり」についても同様に、(149)「外の散りなむとやをしへられたりけん」の注で「花」「箋曰」「已上花」「已上箋」「秘」「花鳥にみえたり」「弄同」、(6)「日いとよくはれて」の注で「箋曰」「秘同」「私云」とする注を付す。C「花宴の巻はことにえんなる物なり」・D「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」については(116)「よにしらぬ心ちこそすれ有明の月の行衛を空にまかへて」(187)「ことうれしき物から」で考証している。『俊成判詞』を念頭に置いて、歌人・歌学者として『源氏物語』を検討しているのである。

これに対して『書入』花宴巻は、『岷江入楚』の(72)(149)(185)(187)に注を付す。次に、この四カ所について、両者を比較してみよう。『岷江入楚』の通し番号、見出しで項目・注釈内容をあげ、次の行に『書入』の番号と注記を付す。

- 1 (72) うき身よにやかて消なはたつねても草のはらを
はとはしとやおもふ

○『岷江入楚』

弄 此ま、はかなく消なは草の原までも尋給へき事なるに名のり

し給へとあるはなのらすはたつね給ましきにやとかちたる哥也
秘同

箋曰しきりに名を尋らるゝにて志のふか、らぬはしられたる也
其ゆへは真実の志ならばなき跡までも尋らるへき也 今にかき
へきことかはと也 名答の作者也 なのらすは尋給ましきかと恨
たる也河 弄秘箋大略同し義也

○『書入』27「うき身世に」

哥ノ心ハサテハ名ノラストハトハシトスルカナノラストモ深切ノ
志アラハトヒ給ハント云心也

俊成が「なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ待るめれ」と記して「右方」を批判した「くさのはら」の語を含む和歌の注である。この和歌、及び和歌に続く「と言ふさま、艶になまめきたり」について、新日本古典文学全集は、「源氏が執拗に名を問うのに応じた歌だが、贈答歌としては、異例にも女の方から詠みかけた贈歌。男に心を傾けてしまった女の、相手の情愛を確かめようとする表現」と記す。それに対して『岷江入楚』は「しきりに名を尋」ねることから「志」が「ふか、らぬ」ことが「しられたる」という。なぜなら「真実の志ならばなき跡までも尋らるへき」であるから、という。そして、名を尋ねられたことに対して切返したこの和歌を「名答の作者也」と記している。『書入』も「ナノラストモ深切ノ志アラハトヒ給ハント云心也」と、「深切ノ志」があれば、名乗らなくても「トヒ給ハン」と、『岷江

入楚』と同様の解釈をしている。

2 (149) 外の散りなむとやをしへられたりけん

○『岷江入楚』

花 古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれば哥の詞になき事をも心をとりにてかくのことくかける也 定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし とよめるは本哥の雲なくしそといへるは雲をいさめたる心なればやかて心をとりにていさむる花とよみ侍る也 この詞に相似たるやうなればよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也 大かた源氏などを一見するは哥などによまむ為也 よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいとさなき人の為にしるしつけ侍る也

箋曰 みる人もなき山里の桜はな外の散りなむ後そさかまし 後そさかましといふは花にいひ教たると云義にてをさへて書也 定家卿い駒山いさむる峯にー雲なくしそと云はいさめたる心なれば如此用る也 此哥の取やう外のちりなんの引哥を手本と取やう也 已上花 已上箋

秘面白き書様也 古今の本哥に後そさかましとをしへたるをもて書たる詞也 花鳥にみえたり 弄同
私云 此取やう尤絶「妙の事とそ 心を付へし」(異同有り)

○『書入』53 「ほかのちりなむとや」

本哥見ル人モナキ山里ノ桜花ホカノ散ナン後ソサカマシ伊勢カ哥也定家ノ哥伊駒山イサムル嶺ニキル雲ノウキテ思ヒノキユル日モナシ 此詞ヲ惣体ニシテヨメルトイヘリ

この「外の散りなむとやをしへられたりけん」という表現は、『古今和歌集』の「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」をもとにしたものであるが、『古今集』の和歌には「をしへ」という言葉はない。このように、本歌とする和歌の言葉にはない言葉を、和歌の意味を用いて詠むことの例として定家の「いこま山いさむるみねにみる雲のうきて思ひはきゆる日もなし」(拾遺愚草2046)をあげる。そして、定家の和歌の多くは「此物語」すなわち源氏物語「より」出たという。源氏物語などを一見するのは歌などに詠むためであり、詠むためには本歌本説の用い方を知らなければならないので、書き付けたと花鳥余情は記している。そしてこの様な歌の取り方は、「外のちりなん」と記したこの源氏物語の本文を「手本」としていると、『花』『箋』が記していると『岷江入楚』は記している。

これに対して『書入』は、もともになつた和歌を示してはいるものの、本歌の取り方についての記述はない。『岷江入楚』が引用する『花鳥余情』以降の注釈書が和歌の詠み方について記述しているのに対して、『書入』にはそうした記述が見られない。『書入』の「内容説明」には、
③ 中院通勝が室町末期にまとめた源氏物語最大の注釈書『岷江入楚』の礎を築いた、幽齋の源氏物語研究の変遷を今に伝える」とある

が、この項を比較する限り、『書入』が『岷江入楚』の礎を築いた」ということはできないであろう。

3 (185) 心いるかたならませは弓はりの月なき空にまよ
はましやは

○『岷江入楚』

河・(略)

花 比はやよひの廿日あまりなればやう／＼弓はりの月になる比也 まよふといふは心にいらぬ故にこそあれと源の哥の中の五文字にかゝりたる返哥也 弄同

秘 ふかく心に入たる事ならはたつねまとはさらましと也 前の哥のまとふ月といふにかゝりたる返哥也 朧は天性哥よみ也 弄同

聞書 此中の五文字にかゝりたるとかめやう前の草の原も同じ様也 面白也

箋曰 真実心にいる事ならはたとる義は有ましき也 源のまとふ哉とあるをとかめてまとふとアルハうはの空なる心からと也 比は廿日あまり下弦の月也

○『書入』76「心入カタナラマセハ」

真実ニヲモヒ入ナハマトハシト也 源氏ニナヒキタル哥也

『岷江入楚』は、185の和歌も、「草の原」の和歌と同様に、こうして源氏の「志」に対する不審を切返した和歌であると解釈した。そして「朧は天性哥よみ也」と朧月夜の和歌を高く評価している。『書入』は「真実ニヲモヒ入ナハマトハシト也」とする前半部分は『岷江入楚』と同様であるが、「源氏ニナヒキタル哥也」とする後半部分は『岷江入楚』およびそこに引用される注釈書とは逆の解釈になっている。

4 (187) ことうれしき物から

○『岷江入楚』

花 草の原をはとほしと思ふといひし其人の声とは聞きなせりうれしきものからの結語おもしろく書なせり かつ／＼うれしきはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり

箋曰 花に草の原の君そと凡は聞なしたれとも六君にや又もし別人にやたしかに知給はぬ心云々 花説さも有ぬへし 此結語誠に物語の眼也 源氏の心にあくかれて有明の行衛を尋知たき心なれば此時其人とたしかに知ぬるは本意のうへの本望也 されとも女の身にて人にこそよれかろ／＼しき事やと心に浅く思給よし也 源氏の性万事においてかくのことし 眼を付へし

秘 花鳥説面白し 但師説此結語は返哥をし給事はうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかろ／＼しとおほしたる也 是源氏の姓也 いつくにも此心あり

弄尋あひたるはうれしけれとも女の返事すへき事のさまは然へか

らすと思ひ給心あれば物からといひのこしたり 是又源の性也
花鳥の説も其故あるにや 五六の間未分明云々 此外心あり い
つれも面白歟 此時のさまうれしけれとも猶あちきなく物思ひな
るへき心をこめて物からといへるにや云々 感あるにや

聞書にはうれしき物からかるくしきと也

箋聞には五六君未分明事云々

さて箋聞にも青表紙の義退而思ふ時はかるくしきか難なると也

師説云々

私云 うれしき物はかるくしきか正説也 花に五六分明ならぬ

と弄ノ義ニいよく物思ひのますと云は異説也 然ともいつれも

面白しと心得へし

箋秘凡源氏物語の中にも此巻すくれたると也 六百番判にも紫式

部は哥よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の艶の巻はことに艶

なる物也云々

○『書入』77「いとうれしき物から」

カヤウノ書サマ此物語ニヲオシソノ人ノ声トハ聞タレトモタシカ
ニシラネハウレシキ物カラカナシキト也 宗祇ノ説ニハカヤウニ
哥ナトヨミカハシソノ人トシルハウレシキ也サレトカク哥ナトヨ
ミカハシソノ人トシルハウレシキ也サレトカク哥ナトヨミカハス
ヘキコトニアラス心アサクヲシメス也藤ツホ葵上ナトニ殊外心ノ
カハリタル事(古の下に又)也好む不捨其惡惡不捨其善ノ心也

「草の原」は、「死後の魂のありか」(全集注)という意味から離れ
て、源氏の言葉をとらえて切返した「草の原」を含む和歌を指す言葉
になった。そして187の注では花鳥余情の「草の原をはとほしと思ふ
といひし其人」という表現を引用している。『岷江入楚』は「花鳥余
情」などを引用して『俊成判詞』の意味を考察しているが、『書入』は
『俊成判詞』とは無縁であるが、「宗祇」の名前を出している。「宗祇ノ
説」は、誰によって語られ、誰に伝えられたのであろうか。

三 『書入』の【内容説明】の再検討

これらの比較をもとにして『書入』の【内容説明】で記された内容
を、再検討してみよう。

① 伝授された源氏物語の奥義と古注釈の享受過程を今に伝える！

『書入』に記された内容は出典が示されないことが多い。そのため、
出典を肩付に明示した『岷江入楚』と異なり、「古注釈の享受過程」を
知る事はできない。また、「伝授された源氏物語」の道統が不明である
ため、その「奥義」の位置付をすることはできない。

【内容説明】

② 幽齋の多数の著作のうち『源氏物語』に書き入れられた注釈部分
を翻刻し公刊！

『書入』に翻刻された内容は、「幽齋の多数の著作のうち『源氏物語』に書き入れられた注釈部分」なのであろうか。もし、幽齋が著作として書き入れたものであるなら「聞書」とは言えないであろう。書物の題名のように「聞書」というのであれば、講釈した人物と講釈を聴いた人物とが必要である。この両者と幽齋とはどの様な関係なのであろうか。

③ 中院通勝が室町末期にまとめた源氏物語最大の注釈書『岷江入楚』の礎を築いた、幽齋の源氏物語研究の変遷を今に伝える！

花宴巻の『俊成判詞』に関する部分を比較する限り、『書入』と『岷江入楚』の注釈内容は大きく異なっている。『書入』の内容が『岷江入楚』作成に活かされたとは想定できない。両者の関係については再検討する必要があるであろう。

④ 略

⑤ 『紫明抄』『河海抄』『和秘抄』『花鳥余情』『弄花抄』などの古注釈からの引用の他、幽齋独自の注、三条西実隆・宗祇・紹巴・兼載・兼如らの説も見られる。

引用した書物の略称を肩付に記した『岷江入楚』と異なり、『書入』は必ずしも引用書目を記してはいない。「幽齋独自の注」であること

を、どの様に見分けることができるのであろうか。

⑥ 幽齋の書き入れには、幽齋が連歌師からの源氏物語講釈によってその解釈を学んだ極めて初期の段階のものと、天正期に九条種通から伝授を受けると同時に、三条西家から借り出してその収集に努め、古注集成の志を抱いた幽齋の源氏学の中核をなすものが反映され、幽齋の生涯を通じて書き入れられていった。

徳岡氏が連歌師の注を継承したとする根拠は、『岷江入楚』真木柱巻「なかめするうたかた」の「聞」とする注に「しばし」とあるのを紹巴の独自注であることによる。『書入』の「聞書」とする注に「シバシ」とあることから『書入』の「聞書」とする注は紹巴の注であるとした。しかしながら『岷江入楚』の注には「聞」「しばし」とする他、「私云」として「しはしといふ心」と注を付す。また、それ以外にも「暫時」とする注が記されている。この注は、読み方を示す注ではなく、解釈を示す注であるから「暫時」と「しばし」とを別な注として扱うことは不適切である。さらに『永祿奥書源氏物語紹巴抄』⁴に「うたかたしはし也(略)暫時也」とあることから、「暫時」と「しばし」とを別な注として、「しばし」のみを紹巴の独自注とはいえないであろう。徳岡氏は『長冊聞書』の同項に「暫時」「しばし」と左右に注が付されていることについて左右の注には時間差があるとされた。そして、「しばし」とする左側の注記を「後人、紹巴の弟子であった兼如あたりの所作の可能性が高いのではないかと推定されたが従

えない⁽⁵⁾。幽斎の源氏物語享受について、「連歌師からの源氏物語講釈によつてその解釈を学んだ極めて初期の段階のもの」「天正期に九条種通から伝授を受け」たものとを区別することができるのだろうか。幽斎が「三条西家から借り出してその収集に努め、古注集成の志を抱いた幽斎の源氏学の中核をなすもの」とは具体的にどのようなものであろうか。そしてそれが『書入』とどの様な関係があるのだろうか。

⑦ 彼の源氏学は、やがて慶長三年(1596)成立の中院通勝の『岷江入楚』に引き継がれて完成する。

『岷江入楚』を見る限り、『河海抄』『花鳥余情』『三条西家の説を中心にして編集されたと推定できる。『書入』は『岷江入楚』とどの様な関係にあるのだろうか。また、中院通勝による『岷江入楚』の成立を幽斎の「源氏学」の「完成」といえるのであろうか。

⑧ 『岷江入楚』が公のためのものであるならば、本書『幽斎源氏物語聞書』はその礎を築いた幽斎の私的な源氏物語研究の変遷を今に伝える貴重な資料といえよう。

花宴巻の一部を比較する限り、『書入』が『岷江入楚』の「礎を築いた」とは言えない。また、『書入』から「幽斎の私的な源氏物語研究の変遷を」知る事は、到底できないであろう。

『書入』の【内容説明】には首肯できない点が多い。その内容につい

ては実証的に再検討することが必要であろう。

注

- (1) 『齋／幽源氏物語聞書』(続群書類従完成会、二〇〇六年)
- (2) 「伝細川幽斎筆『源氏物語』の書入れについて」(上智大学国文学論集 31、一九九八年)「岷江入楚」所引「聞」「聞書」について(同右 33、二〇〇〇年)、「細川幽斎はいかに源氏物語を読んだか」(細川幽斎「二〇一〇年 笠間書院刊」所収)
- (3) 『中京大学文学部紀要』(二〇一六年三月)
- (4) 引用は広島平安文学研究会編「平安文学資料稿」による。
- (5) 小高「岷江入楚の「聞」「聞書」・『幽斎 源氏物語聞書』の書入れについて」(『中京大学国際教養学部論叢』二〇一四年十一月)